

坂本 實先生、お元気で

Farewells to Prof. Minoru Sakamoto

ネットワーク情報学部 佐藤 創
School of Network and Information Hajime SATO

まえがき

坂本 實教授は、本学において 33 年間にわたる教員としての勤めを全うされ、今年度 3 月をもって定年退職される。恒例により 2006（平成 18）年 12 月 20 日、生田校舎 133 号教室で坂本先生の最終講義が行われた。教室を埋めた学生、卒業生、教員、職員一同は、改めて先生の学識の豊かさ、講義の巧みさに感嘆し、盛大な拍手と花束で応えた。

この機会がもう二度と訪れないことが実に惜しまれる。なぜ、私達は普段このような機会をもたないのか。筆者は、坂本先生から本学における学問・研究のありかたについての問題提起をいただいたように思った。

1 坂本先生就任当時の専修大学

1.1 就任時点のようす

坂本 實先生が本学に赴任されたのは 1974（昭和 49）年 4 月である。先生はそれまで獨協大学経済学部の助教授であったが、本学経営学部の「電子計算機総論」担当の助教授として招かれた。そのとき坂本先生を迎えた現職の教員は今や数少なく、ネットワーク情報学部では伊東洋三先生のみであり、森 克美先生は昨年、蔵下勝行先生は一昨年退職された。経営学部でも加藤克己、櫻井通晴、植松日子太郎、広瀬正克、竹村憲郎の諸先生にとどまり、学部誕生以来のすべてを見てきた出牛正芳前学長は今年で理事長職を退かれた（池本正純先生は同期入職）。

数学関係では森、植松両先生のほかに平野次郎、武隈良一、黒田孝郎、小田切美文（当時、経営学部長）、崎野滋樹、大熊 正、清宮俊雄（経済学部）の諸先生がおられ、コンピュータ関係では阿部邦彦、岡崎文次（日本初の電子計算機 FUJIC(1956)の製作者）、大河内正陽の諸先生がおられた。これは文系の専修大学としては尋常ならざる布陣である。そこに数学専門の坂本先生がコンピュータ関連科目担当者として着任された。その頃、本学経営学部は一体何を目指していたのだろうか。

実はすでに 1972 年、ネットワーク情報学部の前身にあたる情報管理学科（定員 80 名）が開設されており、「文

系でありながらコンピュータ利用と情報科学とを学べる」という特色を看板に掲げていた。1974 年度前後の経営学部授業科目担当者を調べてみると、コンピュータ関連では表 1 のようであった。

表 1 コンピュータ関連科目の変化

科 目	年	1973	1974	1975
● 機械工学概論	2	日下部	-	-
電子工学概論	2	日下部	日下部	湯浅
経営機械化論 (M)	2	湯浅	湯浅	湯浅
●○ 電子計算機総論 (H)	②	-*	坂本	岡崎
○ (M)	②	-*	岡崎	岡崎
●○ 電子計算機各論	③	-	坂本	大河内
●○ 電子計算機実習	②	大河内	大河内	大河内
●○ 電子計算機実習	③	阿部	森	森
プログラミング論 (H)	②	大河内	大河内	大河内
○ (M)	2	岡崎	岡崎	大河内
プログラミング論	3	阿部	大熊	大熊
● データプロセッシング論	③	竹村	-	-
● 同 実習	③	竹村	-	-
○ 情報処理論	3	-	竹村	竹村

それまで経営学部には電子処理コース（1971 年度に情報管理コースと改称）があり、これを学科として設置申請するにあたってカリキュラムが改編されたものと考えられる。●印は廃止、○印は新設を表す。数字は配当年次で、情報管理学科 (H) の必修科目を○で囲った。（●○は配当年次の変更を表す。新カリキュラムへの移行は 1973 年度からで、-* 印は前年度 1 年次配当による休講を表す。）

「機械工学概論」、「工業化学概論」、「図学」などは廃止されたが、「電子工学概論」とともにこれらの科目の存在自体が驚きである。「経営機械化論」という科目名がこの時代を象徴している。コンピュータを電子計算機とよぶ方が普通で、経営学科 (M) でも「電子計算機総論」が必修化され、「プログラミング論」も履修できるようになった。「データプロセッシング論」は「情報処理論」と名を変えて選択科目になった。

電子計算機室が生田 2 号館にあり、「電子計算機実習 I, II」の教育に使用されていたコンピュータは、NCR CENTURY 200 であった。磁気ドラム記憶装置を備え、NEAT III というアセンブラーと FORTRAN, COBOL のコンパイラをもっていた。最初はなかなか使い勝手

が悪く、伊藤朋也さん（当時の教務課職員）らの努力により円滑に運用できるようになったと聞く。

次に情報科学関連の科目とその担当者を表2に示す。

表2 情報科学関連科目の変化

科目	年	1973	1974	1975
数学（一般教育必修）	①	(8展開)	(8展開)	(8展開)
経営数学	①	黒田、崎野 武隈、平野 清宮	黒田、崎野 武隈、平野 清宮、大熊 植松	大熊、黒田 武隈、平野 清宮、植松
○情報管理概論	①	大河内	大河内	武隈
経営統計学	2	伊東	伊東	伊東、又城
●○数理統計学	2	崎野	黒田、崎野 武隈、平野 坂本	黒田、崎野 武隈、平野 坂本
●○経営数学	2/3	小田切 黒田、崎野 武隈、平野	小田切	佐藤
●○OR	2/3	崎野	崎野	坂本
●OR演習	4	大河内	大河内	-
情報理論	3	大熊	大熊	大熊
○情報管理特講	3	-	崎野	崎野
○情報管理特講	4	-	-	坂本
○シミュレーション論	4	-	-	崎野
●数値計算論	③	小田切	-	-
○数値解析論	4	-	-	佐藤
システム工学	④	岡崎	岡崎	岡崎
●経営模型計算論	④	稲川	稲川	-
●同演習	4	稲川	稲川	-
線形計画	4	蔵下	蔵下	蔵下
生産管理論	3	春日井	坂本	-
品質管理論	4	小田切	小田切	小田切

特筆するべきは、全1年生の必修科目に数学が2科目含まれていたことである。一般教育の「数学」と専門基礎教育の「経営数学Ⅰ」である。前者の教育内容は記号論理と微積分、後者は線形代数（教科書[1]を共同執筆）である。さらに、1974年より全2年生に「経営統計学」か「数理統計学」が選択必修となり、坂本先生は後者を担当された。このように数学と統計学の教育を徹底させるために、多くのスタッフが揃えられていたことがわかる。1976年度からは一般教育の「数学」は選択となるが、専門基礎教育の「数学概論」が必修科目として新設された。「数学・統計学のわかる経営学士の輩出」に対する並々ならぬ「執念」が感じられる。

上の表を見ると坂本先生は「生産管理論」も担当し、新任でありながらゼミ、卒研以外に少なくとも4科目を受け持ったことになる。翌1975年からの担当科目はしばらく「数理統計学」、「オペレーションズリサーチ（ORと記す）」、「情報管理特講Ⅱ」（内容は動的システムのモデル化など）に落ち着いたように推測される。

なお、廃止された科目「経営模型計算論」はいかにも古典的な名称であるが、その内容は経営管理のための種々のモデル＝モデルの解析であり、後に坂本先生がネットワーク情報学部で担当されることになる「モデリングの基礎」や「数学モデル」に通じるものである。

1.2 経営学部創設期に遡る

理工系の専門家を多く揃え、さらに数学専門でコンピュータにも詳しい坂本先生を必要とした本学経営学部は、一体何を目指していたか。この「謎」を解くために、学部創設期まで更に10数年遡ってみよう。経営学部の創設は1962（昭和37）年であり、それまで商経、法の2学部構成であった本学の組織変革の嚆矢であった。

文献[2]～[5]によると、1958年頃から学部増設の気運が高まり、商経学部商業学科を商学部として独立させる案と新たに経営学部を設置する案とが検討され、1960年の理事会で後者に決定されたという。当時学長の相馬勝夫教授（初代学長の孫）は、コンピュータの普及しつつある変革期の日本経済界の期待に応えるために、革新を担う人材を育てる従来のない新学部の実現に情熱を傾けた。

学長の人脈で10名の専任教員（小田切、出牛、又城、菅井、中村、酒井、小林（健）、小林（義）、砂田ら）が集められ、1961年4月にまず経営研究所が創設され（所長は相馬学長）、そこで独創的な経営学部の設計が行われた。「経営の中で数学・統計学を使え、またコンピュータを使える学生を育てる」という進歩的な発想のもとで、電子処理、一般経営、商品学の3コースをもつ経営学部が構想された。科目構成では、経営学、会計学、商学、経済学、法学の各部門のほかに、特殊部門として

産業科学技術史、自然科学論、化学工業概論、
電子処理論、電子工学概論、電気工学概論、
生産工学、機械工学概論

を設けたところにユニークさが現れている。

同年11月にOKITAC 5090Cが神田校舎に導入され、学部全教員が計算機の講習を受けた。学生定員200名、専任教員24名の規模での設置申請は、翌1月の認可であったため入試の実施が遅れ、2回募集して志願者583名から314名が入学した（定員の大幅オーバーが気になる）。

経営研究所は1963年に、産業教育センターと共催し、日本経済新聞社の後援で、「システム・プランナー養成特別講座」を開催した。これは社会人を対象とする講義で、総計150時間に及んだ。学部創設期の充実した雰囲気窺うことができる（学生はまだ2年次生までしかいない）。

一方、入学生は新学部に意欲的であったとはいえ大部分は文系志向であろうから、理工系科目を多く含むカリキュラムには困難を感じたに違いない。大塚初代学部長は「経営学部の使命」と題して次のように学生を励ましている（1963年度学習ガイドブック）。

『…経営革新の原動力は、経営の機械化であり、その中心をなすものは電子計算機であるといえる。…この変革する経営の中にあつて、よく指導的役割を果たしうる人材を養成し、経営界の要望に答えることが本学経営学部の成立の主旨である。』

この成立の主旨を具現するために、学科目の取捨選択並びに配置には特に意を用いている。数学、統計学等に重点をおくのもその一つの現われであり、理工科系統の

科目が多く配置されているのもまたその一つの現われである。

新しい時代の要請に答え、時代をリードする能力を養成するための新しい学部で学ぶ学生諸君は、この学部の特色を十分に生かした勉学によって、大学生活四年間を有意義に送られることを希望する。』

ちなみに、当時の卒業単位数は152であった。入学時は一般経営コースで、その中から40名程度の3年次生が選考されて電子処理コースに進んだ（商品学コースは実現しなかった）。

学部の教育目標を簡単に表現すれば「文科系でコンピュータを」ということになる。これは一般の人にも分かりやすく、また確かに時代の要請にも合致していたので、それぞれの道でパイオニアを担った卒業生を少なからず輩出できたことは幸いであった。しかし、もう一方の「数学・統計学を経営に」という理念は必ずしも正しく理解されていたわけではなく、さらにその実現の可能性が十分にあったとは言い難い。

1.3 夢の続き・夢の終り

1989（平成1）年、石巻専修大学が開学し、本学校法人に理工系学部が誕生した。開学については学内に反対意見が多かったが、当時の森口理事長と小田切学長は強い意志を貫いた。

小田切教授は1970～1978年の間、経営学部長をつとめて学部理念の実現に力を注がれたが、坂本先生はじめ数学・統計学の教育陣の奮闘は功を奏するに至らなかった（例えば、学生は行列と行列式をほとんど区別せず、その知識が経営手法と結びつくとは思ってもいない）。このとき小田切教授は、本学の土壌では文・理の両立・融合は至難であると痛感されたに違いない。その10数年後、理工と経営の2学部をもつ石巻専修大の初代学長に就任する形をとって、自らの初心を貫ぬかれたのだと思う。

その後経営学部では、崎野教授を中心とし、坂本先生や筆者も含めた有志によって、学内の理工系人的資源を十分に活用するための「情報科学部の設置構想」が検討されたことがあった（[2],[3]を参照）。具体的な計画書を1992年3月、当時の望月学長・山下理事長に提出し、石巻の二の舞を回避するため全学的な新学部検討委員会の設置を要望したが、学長側からは何も回答がなく、構想は単なる構想だけに終わった。

1992（平成4）年4月、経営学部は創立30年を迎えた。そのとき坂本先生は経営学部長在職中（1990～94年）であり、記念刊行物[2]の冒頭に「30周年に寄せて 今後の発展に向けて」と題して、学部の教育課程検討委員会によって教育目標の見直しが行われたことを淡々と紹介されている。

『学部の教育目標はこれまでの専門職業人／研究上の

後継者の養成に替え、「専門教養」の理念のもとに、学部創設当時の意図とこれまでの実績を基礎にして、学科毎の教育目標を次のように設定することになりました。

経営学科：経営にかかわる基礎的な知識や意思決定にかかわる技法を習得し、豊かな発想力を持ち、総合的な判断力を発揮する学生を育成する。

情報管理学科：情報に関連するシステムについての実践的、理論的知識を身につけ、現象のシステム指向的な把握によって豊かな発想力、総合的な判断力を発揮する学生を育成する。』

要するにこれは“夢”の終焉宣言と考えることができる。経営学科はその後まもなく「数学」から解放され、現実的で堅実な普通の経営学部に着いていくことになる。

そして学部創設40周年目前の2001年4月、「学内改編の起爆剤」という意味づけもあって、情報管理学科は改組されてネットワーク情報学部が誕生するに至る。

今改めて思えば、経営学部創設構想の内容は「経営工学」に近い。夢が実現しなかった理由は、文系の学部で経営工学を教えることがそもそも日本では至難であったこと、かつ、その困難さの認識が十分でなかったことにある、と筆者は思う。成功したらまさに革新的であったのだが。

教育陣は「同床異夢」でチームワークに欠け、学生にとっては「木に竹を接ぐ」如き教育であった。日本では文・理間の壁が高く、文系は数理に弱く、理系は経営に暗い傾向が強い。アメリカのテーラー（Frederic Taylor）やサイモン（Herbert Simon）のような“学際的”研究者が育ちににくい環境にある。

ちなみに日本における経営工学科の開設は比較的早く、例えば昨年11月東京工業大学では「経営工学60年」の記念行事が行われている。日本経営工学会の設立は1950年頃であった。ユニークな本学経営学部が構想された背景には、経営工学を学んだエンジニアが日本では未だ十分認知されなかったことがあるのではないか。

2 坂本先生のこと

2.1 ロシア語

坂本先生がロシア語に堪能であることはよく知られている。

少なくとも1960年代、大学生は今では信じられないくらいロシア語に関心を持っていた。1957年、ソ連は世界初の人工衛星「スプートニク1号」の打ち上げに成功し、冷戦相手国のアメリカに与えた衝撃は「スプートニク・ショック」とよばれた。

科学技術、科学・数学の研究はソ連が世界をリードすると考え、ロシア語を第一外国語に選ぶことが理工系の学生たちの間で“流行”していた。もちろん、政治的イデオロギーも“人気”があり、「ソ連」は学生運動の要で

もあった。「ナウカ（ロシア語で科学）」という出版社の書籍が生協で販売されていたことを思い出す（坂本先生より、ナウカは昨年7月に倒産とのこと）。

どのようにして坂本先生がロシア語に堪能になったか、筆者は全く知らない。ただ、早稲田大学理工学部では佐藤常三という教授がロシア語で数学のセミナーをやっていて、そこには大学の枠を越えて優秀な若手研究者が集まっているという話は、筆者の周辺でも耳にした。しかし、先生がその佐藤教授を恩師と仰ぐ間柄にあることを知ったのはだいぶ後である。

2.2 最適制御理論とボルチャンスキー

筆者が助手であった1970年頃、最適制御の数学的理論に興味をもっていたが、ロシア語は全くダメで、日本語で杉山昌平（早大）著「最適問題」を読み、変分法と最適制御とダイナミックプログラミングの3つ原理が等価である、というテーマに魅かれた。そのような折、坂本先生の翻訳されたボルチャンスキー「最適制御の数学的方法」[6]と出会ったのである（実は記憶が定かでなく、ご本人と出会ったのが先かも知れない）。

その頃、ポントリヤギン他著、関根智明（慶大）訳の「最適過程の数学的理論」が知られていたが、先生の訳本の序にある通り、ポントリヤギンは高等な数学を使うので初学者には難解だが、ボルチャンスキーの本は初等的な数学でも厳密さを失うことなく、説明がわかりやすい。

筆者が読んだのは第3版（1972年）であった。先日、懐かしくも改めて本を開くと、ボルチャンスキーから贈られた「日本語版への序文」がちゃんと写真付きで載っていた。筆者の書き込みの中に先生の御自宅の電話番号を見つけた。当時メモした正誤表が挟まっていた、この訳本の改訂の際に微力ながら協力できたのかも知れないと思った（その縁で本学へのお誘いをいただくことになったように思う）。

最適制御問題は面白い。単に静かに微分方程式を解くのではなく、目的をもって制御関数を探索するところが躍動的である。筆者は助手当時、微分方程式を習っている学生達に「こんな面白い問題があるぞ」と言って自主ゼミを促した覚えがある。

先生がどれほど面白いことを手がけていたかを具体的に紹介するために、簡単な例題を引用してみる。

例題 直線道路上、走行中の車を定位置に最も早く停止させるにはどのように運転すればよいか。

定式化 直線上、時刻 $t \geq 0$ における車の位置を $x_1(t)$ 、速度を $x_2(t)$ とし、一般性を失わずに定位置を原点 0、車の質量を $m = 1$ とする。制御はアクセルとブレーキにより加速度 $u(t) = \ddot{x}_2$ を設定することであり、ここでは

条件 $|u(t)| \leq 1$ を仮定する。運動方程式は次の通り。

$$\begin{cases} \dot{x}_1 = x_2, \\ \dot{x}_2 = u, \quad -1 \leq u \leq 1. \end{cases}$$

問題は、初期条件 $(x_1(0), x_2(0)) = (a, b)$ が与えられたとき、最短の時間 T で $(x_1(T), x_2(T)) = (0, 0)$ となるような最適制御 $u(t)$ ($0 \leq t \leq T$) と最短時間 $T = T(a, b)$ を求めることである。

もちろん、制御をせずに $u(t) \equiv 0$ ならば、車は等速運動をするだけである。

この問題の解は、切替え曲線 C を

$$C = C_1 \cup C_2,$$

$$C_1 = \{(x_1, x_2); x_2 \geq 0, \text{ かつ } x_1 = -\frac{1}{2}x_2^2\},$$

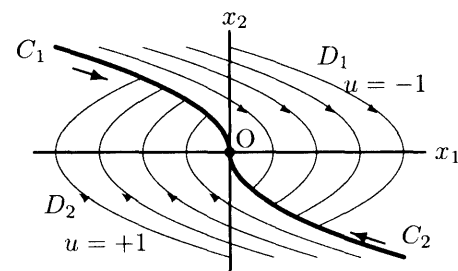
$$C_2 = \{(x_1, x_2); x_2 < 0, \text{ かつ } x_1 = \frac{1}{2}x_2^2\}$$

とし、平面を2分して曲線 C の上側と境界 C_1 を合わせて D_1 、曲線 C の下側と境界 C_2 を合わせて D_2 とおけば、次のように与えられる。

$$u(t) = \begin{cases} -1, & (x_1(t), x_2(t)) \in D_1 \text{ のとき}, \\ +1, & (x_1(t), x_2(t)) \in D_2 \text{ のとき}, \end{cases}$$

$$T(a, b) = \begin{cases} b + 2\sqrt{a + b^2/2}, & (a, b) \in D_1 \text{ のとき}, \\ -b + 2\sqrt{-a + b^2/2}, & (a, b) \in D_2 \text{ のとき}. \end{cases}$$

したがって、最適経路 $(x_1(t), x_2(t))$ は次の図で表される。



現実の車の運転に当てはめるには、車の走る向き (x_2 の符号) によりアクセルとブレーキの解釈を変える必要がある。例えば、 $a > 0, b > 0$ (領域 D_1) から始めるときはまずブレーキを精一杯 ($u = -1$) きかせ、車が止まる瞬間に進行方向を変えてアクセルを一杯に ($u = +1$) 踏み込み、スピードを上げてから今度は (曲線 C_2 上で) 精一杯ブレーキ ($u = +1$) をかけることになる。

最短時間問題ではこのような極端から極端に制御する不連続解が多く、これを「バンバン (Bang-Bang) 制御」という。上記の解は、最大値原理とよばれる定理から導かれるが、詳細は本を参照されたい。

2.3 IBM 1130 と ICS 研究会

1960 年代, 1970 年代は, 学生も教員も大学間交流を盛んに行っていたように思う。

一例として, 首都圏にある数学科の学生が集う「都数集」(都内数学科学生集合)という会があり, 100 人を超える会員を持っていた。筆者は数学科ではないのに, 数学科に入学した親友の誘いによって入会させてもらい, 集合論の自主ゼミに加わり毎週大変楽しく充実した時間を過ごした。初めてコンピュータに触れたのはその電子計算機同好会においてであった。

1960 年代末, いくつかの私立大学で IBM 1130 という小型汎用コンピュータが教育用に導入されていた。筆者も上智大数学科の電子計算機実習の助手としてこのコンピュータを使った。1968 年に一楽信雄先生(理科大)の働きかけで, IBM 1130 をもつ理科大, 上智大, 獨協大, 城西大, ICU 等の間でユーザーズ・クラブが組織された。定期的に研究発表会があり, そこで筆者は坂本先生と出会ったのかも知れない。

なお, 専修大学では 1966 年から 5 年間, IBM 1440 が稼動していたが, 機種の違いで上記グループとの交流はなかった。

多彩な人間関係を母体にして, 若い教員・社会人の集まる「ICS 研究会」が, 村田晴夫先生(上智大)を中心に組織されたのは 1969 年であった。最初のメンバーは一楽, 坂本, 前田功雄先生(獨協大)ら 7 名であったと聞く。ICS は “information, control and systems” の略である。月例研究会活動に加えて, 各地の温泉を巡って催されたシンポジウムでは, 昼間の余韻で深夜にまで及ぶ熱心な議論が交わされた。私的学術団体としての特性が十分に発揮されていたように思う。研究会は年毎に, 会員・会友を増やしていった。筆者はこの研究会から研究活動に関して多大な恩恵を受けている。

ICS 研究会は長期のブランクの後, 最近, シンポジウムを再開した。2006 年夏の会で坂本先生は, 「教育現場から」と題して 1 時間の発表をされ, 学生対象の最終講義とは異なり, 教育の現状について忌憚のない考えを述べられた。先生は Excel/Basic にも精通され, その技術を駆使した教材を授業に活用されている。その現場からの問題提起は, 「学生は準備してやらないと問題を解こうとしない。しかし, その準備が良いほど学生は自分の作業の意味がわからないまま答えを出す。教育は実に難しい」ということであった。その発表資料には, 文献 [7] にある森口繁一先生の次の言が引用されている。

『プログラムを自分で書かなくてもコンピュータを使える時代になった。それでも, 自分の意思で, プログラムを書いて動かすときの気持ちは格別である。それは, コンピュータの可能性と限界を知ることにつながるし, また論理の修練としても好適である。私は国民の何割かがこのような経験をつむことが, 情報社会を健全に発達させるための必要条件だと信じている。』

坂本先生も「吾が意を得たり」の気持ちであったに違いない(文献 [8] も参照されたい)。

2.4 渾沌

筆者が坂本先生と共有するものの一つに, 中国古典「莊子」の中の「渾沌(こんとん)」という有名な寓話がある。渾沌を混沌とあえて区別すれば, 混沌は宇宙・万物のはじめのもやもやした状態(カオス)を表すが, 渾沌は中国神話の帝王である。

『南海の帝王 儻(しゅく)と北海の帝王 忽(こつ)は, 中央の帝王 渾沌の地を訪ね大いに歓待を受けた。儻忽はその恩に報いるため, 目耳鼻口の七穴を持たない渾沌に一日一つずつ穴を穿ていくと, 七日目に渾沌は死んでしまった。』

五感で捉えられるものは分かりやすい。しかし分かりやすい五感だけに頼ると, ものの本質を見逃す恐れがあると, 示唆しているように思う。ある時, 私がこの話題を出したとき, 先生もご存知で, 「面白い」と言われた。

それになぞらえて最近の大学改革を考えてみた。

今, 大学は全入時代を向かえ, その存在意義を社会に示すことがますます必要とされている。それゆえに多くのことが教員に要求される。

講義のシラバスを作れ。

その通り講義しているか自己評価せよ。

講義の意義を分かりやすく記せ。

学生に分かりやすい授業をせよ。

学生に過度の要求をしてはならない。

成績評価のルールを公表せよ。

その通り評価しているか自己評価せよ。

魅力のあるカリキュラムを作れ。

カリキュラムを評価するシステムを作れ。

カリキュラム上の問題を解決するシステムを作れ。…

当節は, 研究に没頭するあまり即興的な授業でその場をしのぐことは不評を買い, 研究室に泊り込み酒ビンを並べるような名物教授の存在はとんでもないとされる。確かに大学には改革すべき前近代性があり, 上の諸要求はご尤もである。

しかし, である。教員にとって, 自分の授業内容が学生の知的好奇心を大いに刺激し, 学生の自己形成の一助となることを願っている。「分かった」という学生の晴れやかな表情を見れば, 労苦を忘れる。自分の教えたいことを知りたいと思う学生がいれば喜んで応対する。この基本的な教員の属性を信じてもらうことが何より大切であり, 今進められている大学改革が「渾沌に穴を開ける」ようなことになってはならないと思う。

先日, 坂本先生から『莊子-古代中国の実存主義』[9] という本の渾沌の部分が電子メールで届いた。「懐かしい思いで, 読み返しています」とのことであった。

あとがき

筆者が「まえがき」で考えたことは、最終講義という特別な機会ではなく、普段の機会に、好奇心で集まる学生対象の講演会を開く可能性についてであった。

授業では連続した受講が義務づけられる。しかし、講演会は単位取得とは関係のない、自ら出席する1回限りの凝縮した知的体験である。すべてが語られないから「考えるヒント」になり、その影響力は授業に勝るとも劣らない。

もちろん、教員はみな忙しく、単に講演を依頼しても「そんな余裕はない」と断られる。しかし、例えば研究会の発表資料を編集して概略だけ紹介するなら余り負担にならないであろう。簡単にできる範囲で行い、過剰サービスをしない。時の話題を面白く解説するのもよい。また、「論集」の投稿論文の解説でもよい。実は、学生は各学部の「学会」のスポンサーである。

何よりも教員自ら、気晴らしになるとよい。2人で組んで一方が質問にまわる手がある。数人で編成してパネル討論をワイワイやる手もある。教員間で交わされる会話は学生にとって新鮮であろう。

問題は、時間と場所と気持ちの「ゆとり」である。

- 学生の時間割が詰まっていれば、出席できない。
- 空いている教室がなければ、講演会を開けない。
- 学生が授業に疲れていれば、好奇心が枯渇する。

そもそも学生が来なければ、講演会は成立しない。

これらの問題点が克服され、知的好奇心の漂うキャンパスが実現される日を、筆者はふと夢見ていたのである。この夢が実現すれば、坂本先生もきっとまた話をしに見えるであろう。

それまで先生、お元気で。

参考文献

- [1] 平野, 黒田, 武隈, 崎野, 「初等線形数学」, 共立出版, 1974.
- [2] 出牛正芳, 「経営学部 30 年の軌跡」, 専修経営学論集, No.55, pp.1-29, 1992.
- [3] 専修大学経営学部編, 「戦後日本の企業経営と経営学」, 森山書店, 1994.
- [4] 竹村憲郎, 「わが国私立大学における経営学部教育の回顧」, 専修経営学論集, No.70, pp.111-137, 2000.
- [5] 特集「本学の情報処理教育の変遷」, センターインフォメーション, 専修大学情報科学センター, 2002.
- [6] ボルチャンスキー, 坂本 實訳, 「最適制御の数学的方法」, 総合図書, 1968.
- [7] 岩波アクティブ新書編集部編「私のおすすめパソコンソフト」, 岩波アクティブ新書 40, 岩波書店, 2002.
- [8] 坂本 實, 「新学期を迎えて」, センターインフォメーション, 専修大学情報科学センター, 2006.
- [9] 福永光司, 「莊子-古代中国の実存主義」, 中公新書 36, 中央公論新社, 1964.